4．松尾頭地区の発掘調査報告

－妻木晩田遺跡第12次発掘調査（内容確認調査）－

1．調査の課題

松尾頭地区は南西から北東方向にかけて、都合4つの高まりが連続するなだらかな丘陵地である。このうち、広域農道東側の丘陵を中心とする1区～3区では、妻木晩田遺跡で最も早い弥生時代中期後葉から集落域が形成される。後期から終末期にかけては集落の中心的な居住域の一つとなり、集落最盛期の後期後葉（Ⅴ－3期）には、大型の掘立柱建物や竪穴住居が検出されるなど、同じく居住域である妻木山地区とは異なる特徴をもつ。

松尾頭地区の調査課題は、居住域の検討からこうした特徴的な建物が竪穴住居群の中でどのようなあり方で存在するのかを検証し、妻木晩田遺跡の集落構造の解明に寄与することである。具体的には、松尾頭地区を特徴づける建物跡が検出された3区が立地する丘陵部の遺構分布状況および内容を精査することが第1の課題である。これは平成17、18年度に重点調査をおこない詳細な検討を行うことで解決を図る。一方、発掘調査の及んでいない丘陵部も存在しており、こうしたエリアの遺構状況を探ることは松尾頭地区の集落構造をマクロ的に捉える際に重要である。とりわけ3区東側の丘陵部の頂部から肩部にかけてはトレンチ調査も行われておらず遺構の状況が不明である[1]。妻木山地区での調査研究では、丘陵頂部縁辺の竪穴住居数棟による居住単位が想定されているが、松尾頭地区との対比も必要である。

こうした課題を念頭に、3区東側丘陵部の内容確認調査（トレンチ調査）を行う。第12次調査は妻木晩田遺跡の発掘調査年次計画のうち、内容確認調査第Ⅰ期のもので松尾頭地区1年次の調査にあたる。調査期間は平成16年4月26日～6月17日、調査面積は約270㎡である。

2．調査の概要

調査対象地の丘陵は、南側および北側斜面部において2区が調査されており、弥生時代後期中葉（Ⅴ－2期）および弥生時代終末期（Ⅵ－1期）の竪穴住居が検出されている。このため、丘陵頂部周辺においても遺構の存在が想定され、その分布状況を探ることを目的に3本のトレンチを設定した。（図1）

調査前の当該丘陵は古くからアカマツの植林地であったが、史跡指定後には枯死したアカマツ林が伐採され、現在はアカメガシワやカラスザンショウなどの低木林にクリやコナラが混じる落葉広葉樹林が形成されつつある。踏査では竪穴住居埋没の最終段階とみられる窪地が数カ所確認されており、T3においてもこうした窪地に遺構の存在を想定し、トレンチを設定した。近代の耕作などによる削平・攪乱がみられる妻木山地区とは異なり、地形や遺構が比較的良好に保存されているものと考えられる。

T1

丘陵頂部から斜面上部における遺構分布状況を連続的に把握することを目的に、丘陵部を横断して設定したトレンチである。長さ約66mであるが管理道で分断される。

表土下の堆積状況は次のとおりである。表土直下には、丘陵肩部から斜面にかけて①層が堆積する。丘陵頂部付近には①層はみられず、下層の⑦層が薄く堆積する。①層・⑦層の下層には②層がみられる。②層は、斜面部で厚さ15～20㎝程度、丘陵頂部では数㎝程度であり、トレンチ全面に堆積する遺物包含層である。T2、T3においても同様の堆積がみられることから、②層は丘陵のほぼ全面を覆う堆積と考えられる。（図2、5、6）

妻木晩田遺跡周辺の地質は、大山起源の火山灰層と広域火山灰層、およびローム層により形成されている。今回の調査では弥生時代の遺構検出面より下層の堆積をⅠ～Ⅳ層にわけた。これはT1からT3の各トレンチで検討したもので、数値が層の上下関係を表わし、Ⅰ層が最上層にあたる。T1での遺構検出面は、平坦部ではⅠ層上面、肩部ではⅡ層、斜面部ではⅢ・Ⅳ層である。（各図土層注記を参照）

T1での遺構分布は、斜面肩部付近ではその規模からみて竪穴住居か段状遺構とみられる4箇所の集落遺構を検出するなど密度は高い。一方、丘陵平坦部周辺では溝状遺構や少数のピットと検出したのみであり、密度は低い。検出面での遺構埋土は黒褐色を呈するもの（S1～S3、ピット）のほか、にぶい黄褐色や褐色を呈するもの（S4～S7）がある。

S1、S2は丘陵頂部平坦面上の溝状遺構である。S1は、丘陵平坦面西側の縁辺部から東へほぼ直線状にのびる。北西側では竪穴住居とみられるS3に切られる。検出面での幅は60～95㎝、サブトレンチにより規模、形状の確認を行った結果、深さ約18㎝の浅い溝状遺構であることが判明した。埋土は黒褐色を呈し、底面付近

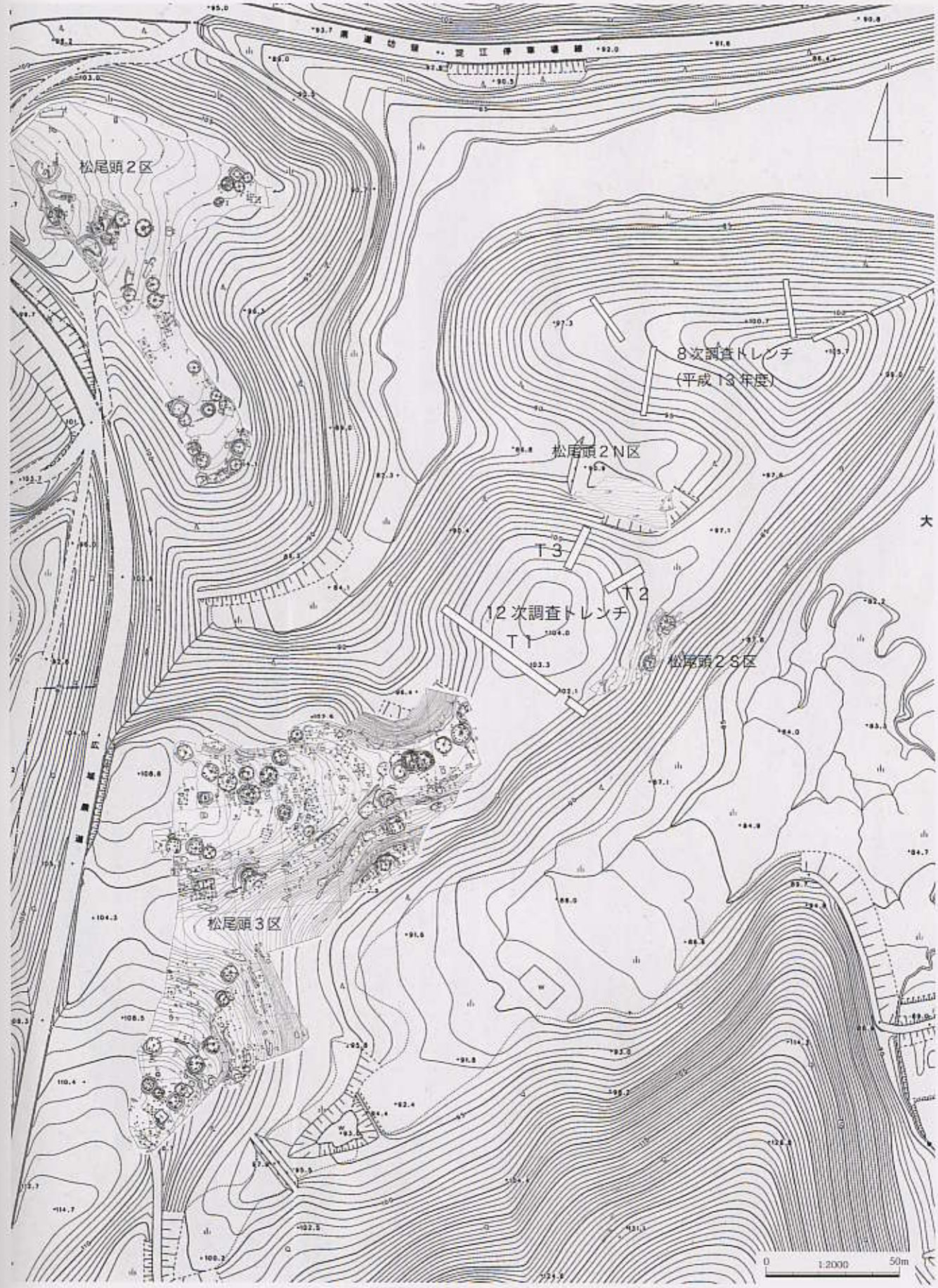

図１　松尾頭地区調査区位置図

103.50m
表土
S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
102.80m
103.00m
103.50m
102.20m
1:40
1:100

図2　T1

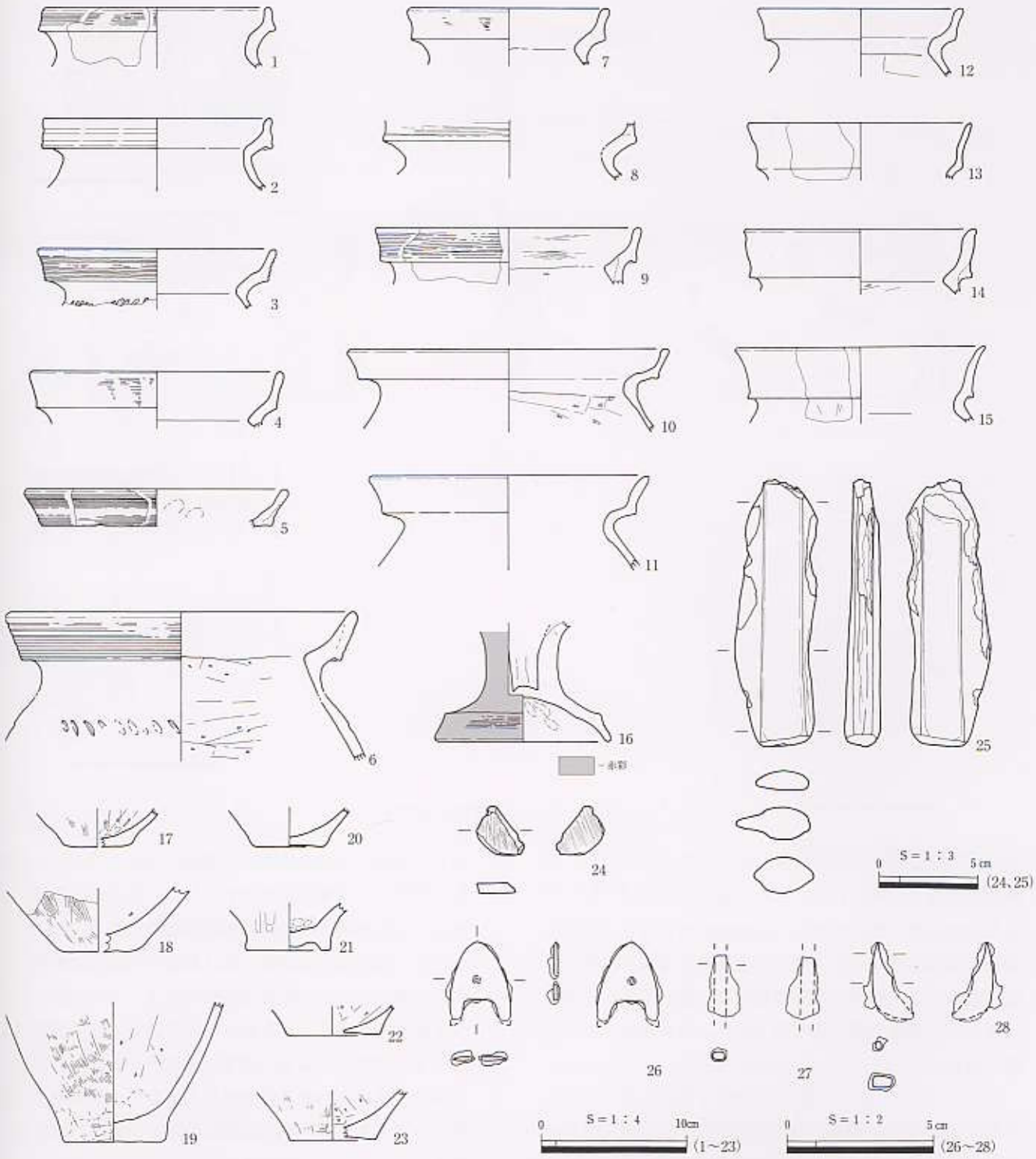

図３　Ｔ１　②層出土遺物

には１層を含む砂混じりの土（⑮層）が堆積する。検出面から弥生土器とみられる土器小片が出土した。Ｓ２は北西から南東方向へ延び、中程で南側へ緩やかにカーブする。検出面での幅は約60～80㎝である。サブトレンチにより確認した結果、深さ約20㎝の浅い溝状遺構であることがわかった。埋土は黒褐色を呈する。検出面から土器小片が出土した。Ｓ１とＳ２の連続性は不明であるが、埋土と規模が類似することから、トレンチ北東側で屈曲し両者が連続する可能性はある。

Ｓ３～Ｓ５は丘陵北西側の肩部で検出した。それぞれの遺構の切り合い関係では、古い順にＳ４→Ｓ５→Ｓ３とみられる。Ｓ３は長さ約８ｍ、幅約1.8ｍの範囲で半円状に黒褐色の埋土を検出した。竪穴住居跡とみられる。Ｓ４は竪穴住居か段状遺構とみられるものである。幅

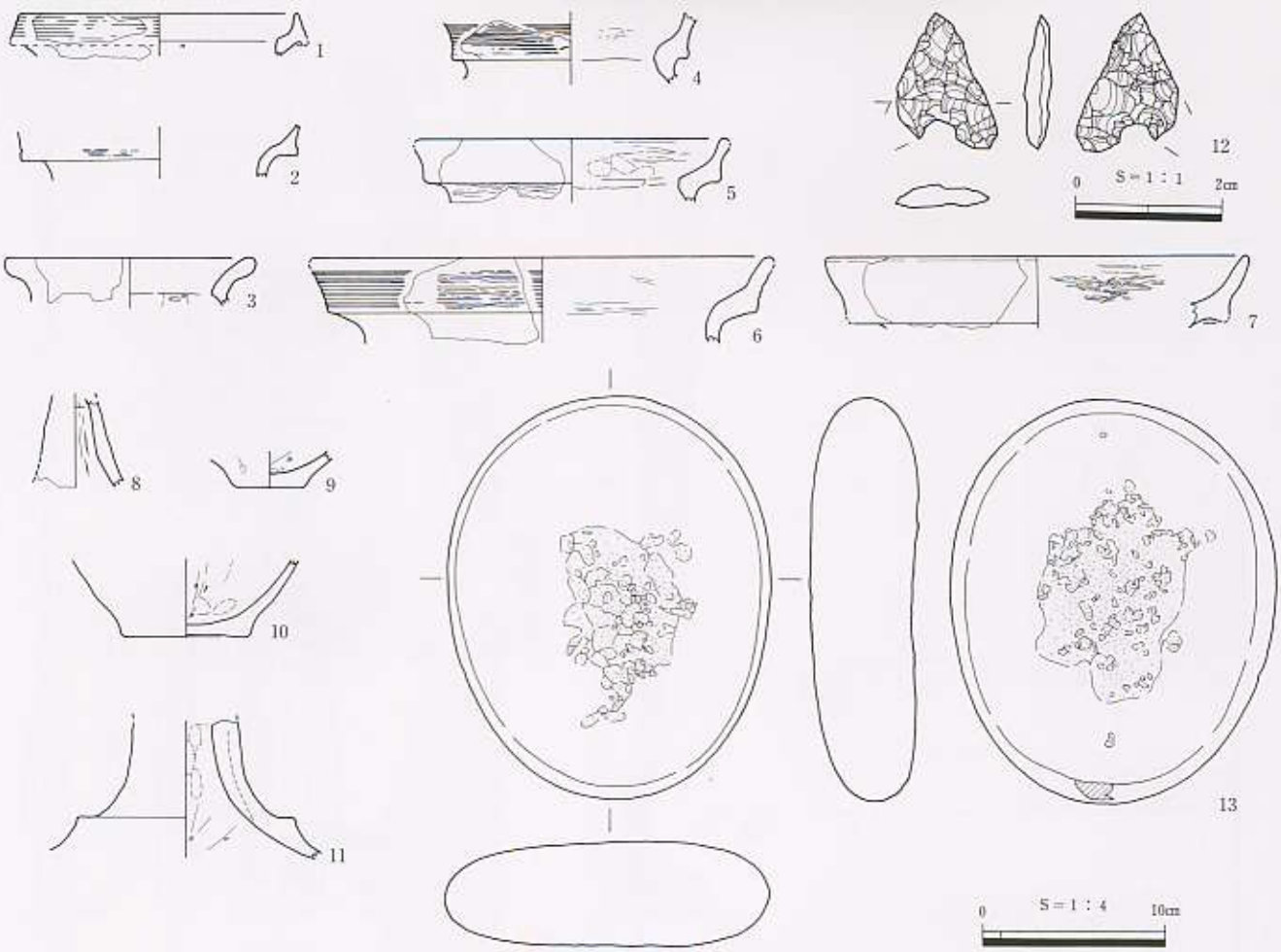

図４　Ｔ１　②層出土遺物（２）

3.5 mの範囲でにぶい黄褐色の埋土を検出しており、南西側ではＳ５に切られる。Ｓ５は斜面上方ではＳ３に切られているが、幅 1.1 m× 5.3 mの範囲でにぶい黄褐色の埋土を検出しており、竪穴住居もしくは段状遺構と考えられる。Ｓ４の埋土と異なるのは、埋土に焼土粒および炭化物小片を豊富に含む点であり、焼失遺構の可能性がある。

Ｓ３～Ｓ５を覆う②層から弥生土器３-１～３-23、石器３-24、３-25、鉄器３-26～３-28が出土した（図３）。土器３-１、３-２はⅤ－２期の特徴を持ち、３-３～３-11、３-16はⅤ－３期の特徴をもつ土器である。３-12～３-15は終末期にみられる口縁部である。

鉄製品 3-26 は鉄鏃、3-27、3-28 は不明鉄製品である。

トレンチ北西端部から出土した３-25は、武器形石製品と思われる石器である。中心軸付近は、断面半円形の研ぎ出しが直線状に延びており、中茎を表現した可能性がある。実測図の上下端部、および右側縁部は階段状に剥離しており、欠損した可能性がある。左側縁部は、まち状に広がるものの、刃部に相当する部分は丸い。いずれも全面的に摩滅しており、明確にはわからない。左側縁のラインを積極的に評価するなら、あるいは銅矛、銅剣といった青銅武器の模倣品の可能性もある。

ただ、山陰地方においては、島根県西川津遺跡や、田和山遺跡において武器形石製品が出土しているが、いずれも弥生時代中期とみられるものである。中四国地域においても後期にくだる明確なものはみられない。全面的に摩滅が認められることを重視するなら、欠損後も、保管、再使用するといった長期にわたる使用も想定すべきであろうか。(2)

Ｓ６～Ｓ８は丘陵南東側の肩部で検出した。いずれもⅣ層上面で検出した。Ｓ６は３m× 2.5 m以上の規模をもち、竪穴住居もしくは段状遺構と思われる。埋土は褐色を呈し、焼土粒および炭化物の細片を多量に含むことから焼失遺構の可能性がある。Ｓ７は３m× 1.7 mの範囲でにぶい褐色の埋土を検出した。埋土には僅かに炭化物を含む。検出面では遺物は出土していない。竪穴住居もしくは段状遺構と思われる。Ｓ８は斜面に直交して溝状にのびるもので、斜面下方側に僅かに弧を描く。幅は

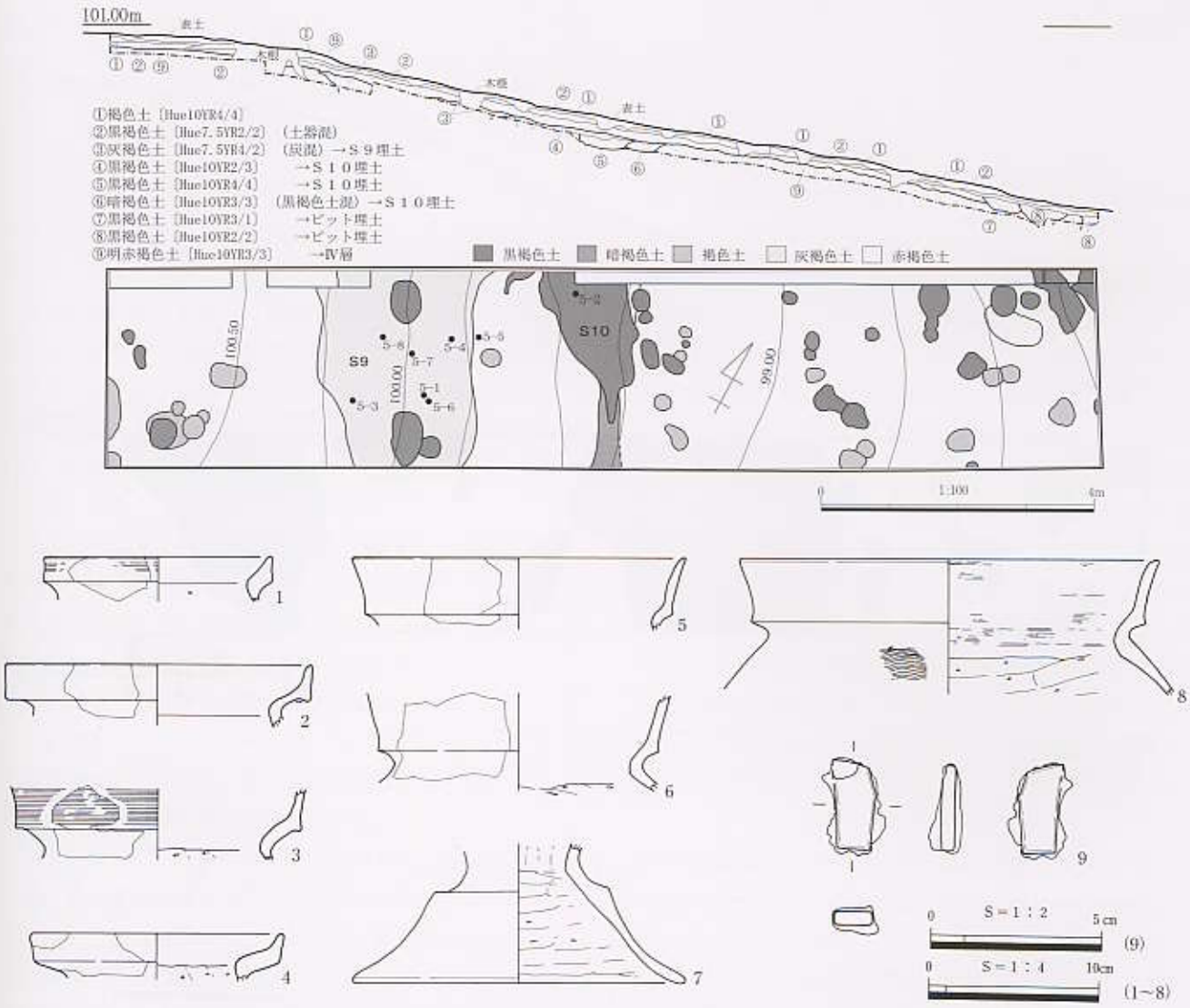

図5　T２・T２出土遺物

20～30㎝、埋土は褐色を呈する。S７埋没後に掘削された遺構であろう。これらの遺構検出面を覆う②層から、土器4-２～4-11、石器4-12、4-13、桃核とみられる炭化種子２点が出土した（図4、種子写真43 P）。4-2はV－２期の特徴をもち、4-4～4-11はV－３期の特徴を持つ。4-13は表裏の中央付近に敲打痕をもつ礫石器、4-12は黒曜石製の石鏃である。

このほか、丘陵縁辺部から斜面部を中心にピットと思われる円形もしくは不整形なピットを検出した。色調は黒褐色、褐色、灰褐色の３種がみられる。黒褐色を呈するものの中には、不明瞭な検出状況から樹木の痕跡かもしれないものが含まれており、上面での検出にとどめたため、全てが遺構なのかどうかわからない。また、これらの中にはS３～S７の上面で検出されたものや、②層上面から掘り込まれているものがある一方、竪穴住居S３に切られるS１、S２も黒褐色を呈しており、埋土の色調の違いが特定の時期を示すものではない。

T１から出土した遺物は、丘陵肩部および斜面部から出土しており、遺構直上の②層から出土したものが大半である。遺構埋没の最終過程において流入もしくは投棄されたものと考えられる。一方、丘陵平坦面から出土したものはV－２段階の特徴をもつ4-１のほか僅かな細片のみであり極めて少ない。

T２

丘陵北東斜面部の遺構分布状況を探ることを目的に設定したトレンチである。表土下には①層が薄く堆積し、下層には②層がトレンチ全面に堆積する。さらに下層にはⅣ層がある。遺構検出面はⅣ層上面である。S 10下方では薄くⅡ層とみられる堆積がある。包含層堆積状況の確認のため、壁面に沿いサブトレンチを設定した。

検出した遺構は、S９、S 10、ピットである。S９では2.3 m×３m以上の範囲で灰褐色の埋土を検出した。トレンチ壁面では遺構の端部が立ち上がる状況が確認されており、竪穴住居もしくは段状遺構と思われる。

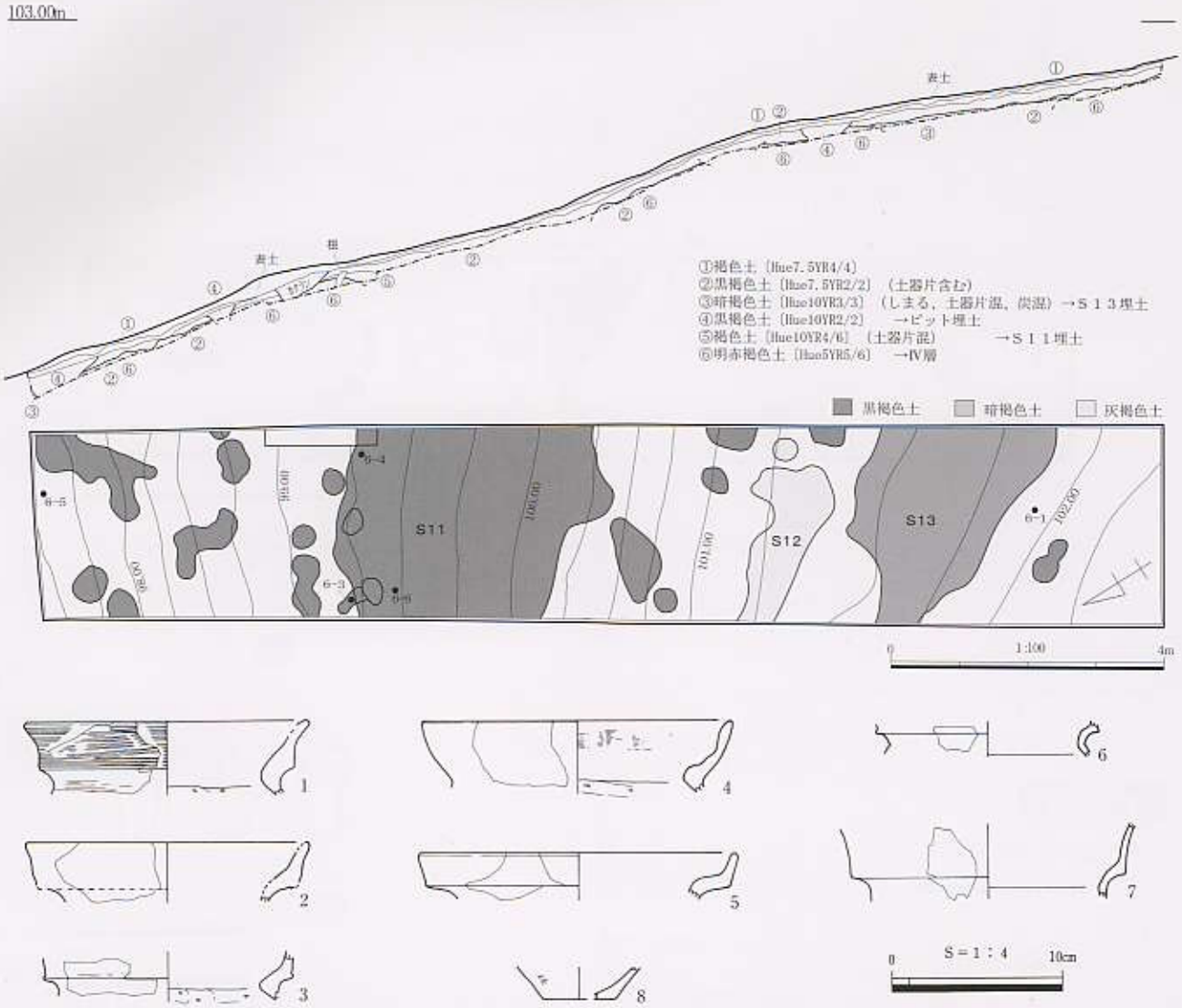

図6　Ｔ３・Ｔ３出土遺物

埋土の③層に半ば埋没した状況で器台５-８が出土した。Ⅵ期の特徴をもつ土器である。Ｓ10は幅0.3ｍ～1.2ｍ、トレンチ土層断面では深さ約15㎝を測る浅い溝状遺構と判断され、斜面に対して直交する方向に掘削されている。遺構の重複が想定され、幅が狭く暗褐色を呈する南東側の溝が埋没した後に、幅広で黒褐色の埋土をもつ北西側の溝が掘削されたものとみられる。これはトレンチ土層断面の⑤層と⑥層に対応するものである。

このほか、円形または不整形なピット状の落ち込みを検出した。埋土には黒褐色、褐色、灰褐色、赤褐色の４種がみられる。黒褐色の埋土をもつものには形状が不整形で明瞭ではないものも含まれており、樹木の痕跡などがある程度含まれるものと思われる。赤褐色の埋土をもつピットは他のトレンチでは確認していない。

Ｓ９、Ｓ10の直上の②層から土器５-１～５-８、板状鉄製品５-９が出土した。５-１～５-２はⅤ－２期の特徴をもち、５-３はⅤ－３期、５-５～５-８はⅥ期の特徴をもつ。

Ｔ３

北東側斜面上方の遺構の把握を目的に設定した。トレンチ周辺の地形は、上方の丘陵頂部から続く緩斜面が、標高101ｍ周辺で傾斜変換し、トレンチ下端直下の標高97ｍ付近でさらに急傾斜をなし谷へ向かう。現況では、標高100ｍ前後に浅い窪地がみられる。埋没しきらない竪穴住居が窪地をなす状況は一次調査においても確認されているが、松尾頭地区においてもこうした窪地が遺構の痕跡なのかどうか検証することを考慮し、窪地を断ち割る方向にトレンチを設定した。

表土下には薄く①層が堆積し、下層には10㎝～20㎝の厚さで②層がほぼ全面にみられる。さらに、下層にはⅣ層が堆積し、この上面で遺構を検出した。Ｓ11は現況で存在した窪地部分で検出した遺構である。幅約3.5ｍである。遺構上方から中央付近は②層の落ち込みのため黒褐色を呈し、遺構下端付近は褐色土（⑤層）が

みられる。現況の地形は、S 12付近の傾斜変換点からほぼ直線的にくだる斜面に掘削されたS 11の最終埋没過程を反映した地形と判断される。

S 12はトレンチ上方に位置する。幅0.8 m前後、長さ2.3 mを測る不整形な形状である。埋土はにぶい褐色を呈する。トレンチ内で途切れるが、浅い溝状遺構の可能性がある。S 13はトレンチ上端部の緩斜面部で検出した。幅は南東側では約2.2 mと広く、北西側では約0.9 mと狭くなる。埋土は暗褐色を呈する。

T 3から出土した遺物は少ない（図6）。遺構検出面を覆う②層から土器6-1～6-8が出土した。6-1はV－3期の甕口縁の特徴をもつ。6-2～6-5はV－3期もしくはVI期の甕口縁であろう。6-6、6-7は薄手の器形や胎土からみてVI期の特徴をもつ。

3. まとめ

本調査の主な課題は丘陵上部の遺構状況がわからない3区北東側丘陵部の遺構分布状況を探ることである。

T 1で検出された遺構は、竪穴住居または段状遺構が5基、溝2本、ピットであり、遺構・遺物ともに丘陵肩部に集中する傾向がある。T 2では、竪穴住居もしくは段状遺構が1基、溝1本、ピットを検出した。T 3では、竪穴住居もしくは段状遺構1基等を検出し、調査前にみられた窪地が遺構の痕跡を示すものであることを示唆した。

出土した土器はV－2期、V－3期、VI期の特徴を有しており、周辺に当該期の集落遺構が想定される。V－2期およびVI期の遺構は、丘陵斜面部の2区や西側の3区で調査されており、丘陵肩部から斜面部においても居住単位が形成されているものと想定される。一方、平坦部での遺構分布は、T 1でみる限りは少ない。妻木山地区での調査研究では、V－3期の竪穴住居群が丘陵の肩部に集中する傾向が認められているが、こうした一例かもしれない。ただ、終末期や古墳時代前期など新しい時期の竪穴住居は丘陵頂部にも構築されており、こうした時期ごとの遺構分布も、丘陵頂部の機能を考える上では重要な検討課題である。いずれにしても、丘陵頂部の状況はいま少し探る必要があり、今後の発掘調査の中で、課題解決を図りたい。（岡野雅則）

註

（1）松尾頭地区の丘陵先端部では7次調査（平成13年度）において試掘調査が行われており、住居跡または段状遺構とみられる遺構が検出されている。

（2）武器形石製品の評価については、寺前直人氏（大阪大学）にご教示いただいた。

第12次調査出土遺物観察表

土器

・（ ）は復元推定値を示す、→は器面調整の順序を示す。
・胎土の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による

No.	トレンチ	層位	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	色調	調整 外	調整 内	残存率	備考
図3－1	T 1	②層	甕	(15.0)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/8	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図3－2	T 1	②層	甕	(15.4)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/4	口縁外面にナデによる回線文
図3－3	T 1	②層	甕	16.0	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/1	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図3－4	T 1	②層	甕	(17.0)	－	－	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/2	口縁外面に貝殻復縁による条痕文か
図3－5	T 1	②層	甕	17.0	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/1	口縁外面に貝殻復縁による条痕文のち、ナデ
図3－6	T 1	②層	甕	16.0	－	－	外面：橙色 内面：橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/1	口縁外面に貝殻復縁による条痕文，胴部上端付近に連続刺突文
図3－7	T 1	②層	甕	(13.4)	－	－	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/5	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図3－8	T 1	②層	甕	(16.6)	－	－	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/4	口縁外面に平行沈線文
図3－9	T 1	②層	甕	(17.4)	－	－	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	ハケ→ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図3－10	T 1	②層	甕	(21.8)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	不明	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	外面剥離により調整等不明
図3－11	T 1	②層	甕	(18.9)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	不明	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	外面剥離により調整等不明
図3－12	T 1	②層	甕	(13.8)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/4	－
図3－13	T 1	②層	甕	(15.0)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：明黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/12	－

No.	トレンチ	層位	器種	法量(cm)			色調	調整		残存率	備考
				口径	底径	器高		外	内		
図3－14	T1	②層	甕	(15.6)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	－
図3－15	T1	②層	甕	(17.0)	－	－	外面：にぶい褐色 内面：明褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/16	－
図3－16	T1	②層	高坏	(11.6)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	ヘラナデ	ナデ	脚部4/5	脚部下端外面に平行沈線文、外面赤彩
図3－17	T1	②層	底部	－	(4.6)	－	外面：黄灰色 内面：にぶい黄色	ハケ→ナデ	ケズリ	底部2/3	－
図3－18	T1	②層	底部	－	(4.4)	－	外面：オリーブ黒色 内面：暗灰黄色	ハケ→ナデ	ケズリ→ナデ	底部1/4	－
図3－19	T1	②層	底部	－	6.6	－	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	ハケ	ケズリ	底部1/1	－
図3－20	T1	②層	底部	－	(4.8)	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	不明	不明	底部1/4	－
図3－21	T1	②層	底部	－	5.5	－	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	ヘラナデ	ナデ	底部1/1	－
図3－22	T1	②層	底部	－	(6.3)	－	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	不明	ケズリ	底部1/2	底部中央に焼成後の穿孔あり
図3－23	T1	②層	底部	－	(5.9)	－	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	ハケ→ナデ	ケズリ	底部1/3	－
図4－1	T1	③層	甕	(15.4)	－	－	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/5	口縁端部外面3条の平行沈線文
図4－2	T1	②層	甕	(15.5)	－	－	外面：浅黄橙色 内面：浅黄色	不明	不明	口縁1/6	不明瞭であるが、口縁外面に貝殻復縁による条痕文か
図4－3	T1	②層	甕	(12.6)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：黒色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	－
図4－4	T1	②層	甕	－	－	－	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ハケ→ナデ	口縁1/8	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図4－5	T1	②層	甕	(16.6)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ナデ	ハケ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	－
図4－6	T1	②層	甕	(25.0)	－	－	外面：明赤褐色 内面：赤褐色	ナデ	ハケ→ナデ	口縁1/12	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図4－7	T1	②層	器台	(22.6)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰色	不明	ミガキ	口縁1/8	－
図4－8	T1	②層	高坏	－	－	－	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	不明	成形後調整なし	筒部1/1	－
図4－9	T1	②層	底部	－	3.8	－	外面：明黄褐色 内面：暗灰黄色	ハケ	ケズリ	底部1/1	－
図4－10	T1	②層	底部	－	6.6	－	外面：にぶい黄橙色 内面：オリーブ黒色	ハケ	ケズリ	底部1/1	－
図4－11	T1	②層	器台	－	－	－	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	不明	ケズリ	筒部下半1/3	－
図5－1	T2	②層	甕	(13.1)	－	－	外面：橙色 内面：黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図5－2	T2	②層	甕	(17.7)	－	－	外面：赤橙色 内面：黄褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/12	－
図5－3	T2	②層	甕	－	－	－	外面：明褐色 内面：褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	頸部1/8	－
図5－4	T2	②層	甕	(14.5)	－	－	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	－
図5－5	T2	②層	甕	(19.3)	－	－	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/12	－
図5－6	T2	②層	甕	－	－	－	外面：黄褐色 内面：明褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	－
図5－7	T2	②層	器台	－	19.2	－	外面：橙色 内面：明黄褐色	不明	ケズリ→ナデ	脚部3/4	－
図5－8	T2	②層	甕	(24.4)	－	－	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	ハケ	ハケ→ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	－
図6－1	T3	②層	甕	(16.3)	－	－	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ハケ・ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/6	口縁外面に貝殻復縁による条痕文
図6－2	T3	②層	甕	(16.2)	－	－	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	ナデ	ナデ	口縁1/9	－
図6－3	T3	②層	甕	－	－	－	外面：橙色 内面：黄橙色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/8	口縁外面に平行沈線文
図6－4	T3	②層	甕	(18.0)	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	ハケ	ハケ→ナデ、 頸部以下ケズリ	口縁1/10	－
図6－5	T3	②層	甕	(18.4)	－	－	外面：橙色 内面：明黄褐色	ナデ	ナデ	口縁1/10	－
図6－6	T3	②層	甕	－	－	－	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	ナデ	ナデ、 頸部以下ケズリ	頸部1/10	－
図6－7	T3	②層	甕	－	－	－	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	ナデ	ナデ	口縁1/12	－
図6－8	T3	②層	甕	－	－	－	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	ハケ	ケズリ	底部1/4	－

石器・鉄器

No.	トレンチ	層位	種類	法量（cm）				備考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	
図3－24	T1	②層	砥石か	2.5	2.4	0.5	5.4	表裏面に研磨痕
図3－25	T1	②層	武器形石製品	13.5	4.2	1.8	120	表裏の中心軸上に断面半円形の研ぎ出し。全面的に顕著な摩耗あり。
図3－26	T1	②層	鉄鏃	2.7	2.1	0.2	－	無茎、鏃身の中央付近に穿孔
図3－27	T1	②層	棒状鉄製品	2.1	0.4	0.3	－	－
図3－28	T1	②層	不明鉄製品	2.6	1.4	0.4	－	〃　　〃
図4－12	T1	②層	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.6	黒耀石製　　〃
図4－13	T1	②層	礫石器	22.1	17.8	6.0	3517	表裏面中央付近に敲打痕
図5－9	T1	②層	板状鉄製品	2.6	1.3	0.4	－	鉾の一部か